



纂說自警錄

全

口仁9  
1.906



明  
號  
卷  
1306

序

明道程先生曰愛子為之  
輕俊者只教以經學念書  
不得令作大字子家凡百

纂說自警錄

全

序

明道程先生曰。憂子弟之  
輕俊者。只教以經學念書。  
不得令作文字。子弟凡百  
玩好。皆奪志。至於書札。於  
儒者事最近。然一向好著。亦



自喪志。僕曾好碁。碁蓄禽  
漁獵。而年與長。喪志之甚  
矣。傳有之。曰。吉人爲善。惟  
日不足。凶人爲不善。亦惟  
日不足。遂成枯落。悲歎窮

廬將復何及也。故按記故  
人之嘉言善行。而爲謹戒  
之一助而已。

嘉永元年申孟冬吉辰

宏齋山内親俊自序

以公之學言善於所學  
蓋秋夏遊於此者遊於焉



紀伊侯欽待臣酒酒闌俾各言其所好樂或讀書或  
武技或詩或歌或演樂雜劇酒也茶也自田獵釣漁  
以至凡百局戲皆對以實有山下治左衛門者好鳩  
珍禽畜之侯問種類幾許答曰臣之所餌養不下於  
二百隻矣侯莞爾笑曰盛哉他日吾就視于汝家可  
乎山下祿二千石班在上士之下中士之上故事非  
大夫侯不辱臨於家以故大悅即日灑掃庭內渴望  
二十許日杳無再命丁日科頭燕居於室中忽報君  
侯至驚起衣冠出迎拜於門侯入周宅中而美其鮮  
麗尋入鳥堂一一問其名陳其鳴蓋山下善畜禽聲

最後有巨雞大倍常者。侯問其名。對曰：是為反毛。最  
難得。侯曰：可使彼出遊乎？曰：可。乃出於籠。侯曰：籠大  
可容人。汝試入此。山下即覆籠而跪坐。傍有大石重  
十數斤。侯與侍臣舉置諸籠上。無言而出。山下在籠  
中四五日。公問不至。同舍即從容請於侯。侯曰：何有  
若而者。舍不省焉。固請。乃問之眾侍臣。僉曰：信矣。侯  
笑曰：是誠何心哉。日也。吾詣先君之墓。僧迎而酒吾  
醉之所使。茫乎不記。盍速召之。山下至。侯曰：吾由醉  
之戲。延及今日。合汝受不可忍之苦。山下再拜曰：君  
命乃未知之何苦。則苦矣。曰：其然。其然。由此觀之。冲



霄集林之翼。局在方尺樊籠。若三四年。若五六年。比  
汝四三日。不亦霄壤乎。山下叩頭流血。謝辜而出。當  
日咸放之。礪行慎身。遂為善士。爾後邦內林無游佚  
淫樂之士云。鳳翔集

蒲生氏鄉朝臣。九歲。三ヲハセシ時。磯野何ガレトイフ。家臣。  
三光ノ鶯ヲ籠ニ入テミイラセケル。磯野歸リテ後。氏鄉公  
仰有レハ。志レノ程ハ。嬉ク侍レト。ガリカウ。人ヲ故ク守獄  
ニハナシテ。夫ヲレテ。諺ナド多ハセ多シコトナル事ナレ。鶯モ竹ノ林  
梅ノ枝ナシトトヨリ居テ。春和ヲ得テ。トト鳴タラニ。ニユノモ  
レロク侍レト。乳母ヲレテ。テ放ケレメタマヒト。ナン都言事  
下同

古人曰。物ヲ玩バハ志ヲ失フト宣哉。太閤朝鮮征伐ニモ  
圍碁ヲ事ヲ起シト有。碁ハ古來多ク人ノ損スルコト  
多シ。漢土ニモ此異名ヲ木野狐ト呼トス。ハカナル事ナ  
カレ

厨ノ多し。物ヲ玩バハ志ヲ失フト宣哉。太閤朝鮮征伐ニモ  
圍碁ヲ事ヲ起シト有。碁ハ古來多ク人ノ損スルコト  
多シ。漢土ニモ此異名ヲ木野狐ト呼トス。ハカナル事ナ  
カレ

入らばて。雲々。こび。飛山。と。おの。お。然。や。ひ。何。も。い。思。ひ。ま。り  
子。あ。ら。う。て。悲。び。か。う。心。あ。え。ん。人。を。さ。こ。の。ま。ん。や。也。  
と。う。め。て。目。を。下。注。こ。が。し。む。ふ。ハ。樂。樂。分。の。あり  
王子。猷。が。多。と。き。せ。し。ハ。林。子。の。し。ふ。と。ん。て。せ。う。  
え。外。乃。友。と。し。た。と。く。ら。し。め。さ。れ。あ。ら。ぶ。也。凡  
め。づ。り。し。と。會。何。中。に。熟。玉。は。局。し。る。ハ。也。と。し。も。文  
子。の。傳。多。く。也。下。同。也。  
雅。房。大。納。言。ハ。カ。ク。し。く。し。た。人。を。し。お。も。る。さ。ら  
と。和。ほ。し。け。不。比。院。乃。を。名。ある。人。と。今。あ。ら。ま。し。た  
と。と。尺。指。り。つ。と。や。え。れ。る。也。何。こ。と。も。ま。と。し。て。終。ひ

くさ小雅唐の書にうんといふる云乃足とさう作  
はるを中垣乃虎子一尺作つて申されたるおと  
まゝくまゝおぼしめて日本の所氣候もたがひ昇  
鏡もまゝのまゝけりさういふなり乃人畜とわくま  
こりたるの思ひけるれど大乃足ハ作られたるなり  
虚説ハ不使あれどもかゝるとさうせ給ひてまゝ  
ぬひたる君此所ハいふと多ありて車ありて大くこ  
いなる物としりしいさめ多ありて免り。あひあ  
しまへ畜生猪鬃乃とらひあり。若れ畜獸といふ  
虫まゝ毛んといふて有根とらるま子成りて親と

あつてく。未ぬとまゝあひ福とさういふ。歎おほく  
身とあひし。奈とわく。久る車びく。は。厚。癒。ある。ま。  
人より毛は干して。髪し。うまにらる。と。あ。ま。  
命とうを之と。い。う。で。わ。い。と。ま。り。さ。ら。ん。ま。う。へ。く  
一切乃有情と見て。慈悲乃んるうらん。人倫はらび  
○圓基双六好てあつてく。乃。今。四。五。子。逆。子。毛  
まこれ不熱車とをわく。ある。髪。乃。中。五。車。耳。に  
こ。ま。う。て。い。い。と。く。を。是。え。信。る。  
此段依佛説而為戒也  
辨異端在下

右戒玩好



化未季冬旬五之夜閑坐讀書語至今之學者  
爲人而忽打机謂予學亦爲人也曾所行夫子  
之所謂下愚也却而駭不學者故述愚意而自  
今以後爲自警且子孫之戒固非可示他不學  
文拙幸有高覽之君子無誹予之短才幸甚

凡爲士者不擇貴賤學向といこはくは學向と  
て別つかそり申儀もこれなくは親はて孝君は  
忠一家は治まじく少も人と無争か學向は  
孔夫子も君子も無所争と謂り當時學向仕由申  
輩は絶句予水等か如くある不学人うかおそり

申もの有之は少く文字を知り古事とも端く覺  
ゆる人と何あそりやのま子傲る左にけつと  
しは能士の様子見へは得共實も誠の心あくし  
て奴僕の振舞はれこれに我不學の人子誹り  
笑れおそり申はあるは詩文を流くも或も書  
籍をもとあぢひ得こりもさる輩て何の益も無  
之事に以學向し右申通人こる所の道にと人ど  
生ころもの是を不知く偏り禽獸の有様も種  
まらまを書せよえりも古の聖賢の御言葉も種  
まらして心身北子夫をせんこめふれも不學甲書

近思錄のまゝいよと熟讀いよし録力ありて五經  
おとほも及其義理を尋下字下句も今日の上子  
ひきうけて可脩行の爲すいよしりこせ眞の學  
問を申へくはさまは志ある士を勤學油取せ  
まじ此儀にてり年自誌  
下同

### 國學論

或曰居我國而學儒道猶不忠於我君而忠於他之  
君不孝於我親而孝於他之親也陋哉言夫道一而  
已矣道之在天下也猶日月也日月者天下之日月  
也非一國所私有也道亦然豈有彼此哉載之以文

彼舊於我彼來而貢之我取而用之何有所謂國云  
者乎太華先生曰人之有仁義忠孝固天之所賦也  
而其驕狠敖惰亦氣質之偏人不能無之也有其實  
則有其名凡自天地陰陽風雨寒暑以至於人物百  
事有其實則命之名以便稱呼自然之勢也聖人以  
其善者爲法而懲其惡者教之所由起也今人家有  
子弟孰不教之忠孝恭儉而戒其敖狠驕惰乎人君  
之子視萬民亦然故一家之教乃一國之所以教也  
此道也窮天地亘古今人類之所在無適而不然焉  
何有彼我區域之別哉故雖我邦之人忠孝仁義固

同一性。但古未有文字之紀之耳。故及漢土書藉之  
來。而隨其名。稱而稱之。又以為教。亦自然之勢也。而  
近世有以其名義文字。皆自彼來。槩為出於彼土。聖  
人之作為。而欲廢而斥之者。因斥我。先皇博求善  
之公心。而非之。斥上古未有文字之前。而指其荒唐  
繆悠之說。以為道。自應神以往。列聖之所為。皆  
不屑之矣。是蓋出於其忌克之私心。而非公平之見  
也。然欲對漢土而別創一道者。勢不得不然焉耳。至  
哉先生之言也。我儒先王已取而用之。著為令典  
矣。而敢非議之。是議先王之典者矣。而幸免於誅

也。

贈熊谷直格因而為自警誌焉

昨夕之會。不幸而先生不到。環坐及雜談。多此遊獵  
蓄禽之事。然足下獨奮然問以禮樂。僕雖不知所以  
對。不得已而以一二事告焉。足下然之。且僕語以朋  
君家訓。書中有士不貴博學而貴實學。故四書小學  
近思錄為急功。至曆史則有餘力則學可也。子夏曰  
賢。賢易色。事父母能竭其力。事君能致其身。與朋友  
交言而有信。雖曰未學。吾必謂之學矣。子夏聖門之  
高弟。其學如此。豈徒以博識為貴乎。小學云。聖人之

熊谷氏之論以  
博學為宗故  
辨焉

道入乎耳存乎心蘊之為德行行之為事業彼以木  
辭而已者陋矣故學者以德行為先如足下則志大  
而略於事夫子之所謂狂簡之徒子然非所吾輩企  
及就良師友而學則將為君子乎不知所以裁之故  
無良師友則將為小人乎僕深惜焉足下不恥下問  
故示之而已頓首再拜

家祖自警

- 一畏天道可正身事
- 一偽間敷事 偽于首尾能ヨリ誠于首尾不且増也
- 一色々之忘念不出様心ヲ可持事 忘妄之誤也

- 一不可念舊惡事
- 一驕之事 心之不付ル所ニ可有之
- 一非禮之禮非義之義 大人不為ト云事
- 一物クト云間敷事 但シ人之言ヲ其理ヲ能ク可聞屆事
- 一三思一言九思一行能々可思出事
- 一見義不為無勇也此語能々可思慮事
- 一可知人之善惡事 真詐正邪能々可有辨事
- 一改過不可吝事 過ヲ不可飾事
- 一可正賞罰事 愛而知其惡憎而知其善事
- 一先言可盡行事

向不之下脫可之字  
乎

一不遷怒事。喜怒人之善惡ニヨリテ起。少モ跡ニ  
ノコス不可事。

一何事モ不可向他求事。歌 賤レトモ愚ナリトモ  
言ハレハ人ニ求ル吾ニアラ子バ

一不可深後悔事。歌 サレアタル其事ノミヲ思  
へ唯カヘテ又昔知又行未

一不断養生是忠孝之根源ナル事。歌 植テ見ヨ花ノ開又  
一勤而不成ト云フ無事。歌 植テ見ヨ花ノ開又

里モナレ心カラコソ身ハ賤レケレ  
一樂不極欲不可縱志不滿事。歌 誰モ見ヨ盈レ

ハヤカテ虧月々十六夜ノ空ヤ人ノ世ノ中。

楠公之遺言

敵雖多勢不可驚。依一善言為味方。味方雖多不可

頼。依一惡言為怨敵。刀雖利不可悅。心乱則害其身。刀

雖鈍不可恨。心正則復大敵。蜀都言州下同

達人ノ言ハ何事ニ用ヒテモ妙アリ。能ク味フベレ

古語曰。善人ニ交ハ芝蘭之室ニイルカゴトク久レウレ

云。益ニホヒ。悪人ニ交ハ棘ノ室ニイルカゴトク久レウレ

云。益クサレトカヤ人ハナラ水ノ如ク。方圓ノ器ニ

レタカヒ。善惡ノ友ニヨル。其マレハ所ヲツレモ

復服之誤乎

ガラシヤサレバ時頼公ノ歌

ヨキ人ニムスヒテ惡キ事ハ無。麻ノ中ナルヨモギ蓬見ニモ。

祈禱ハ驗ナレ

去ニテモ淫祀トイフ事止マヌモノニテ珠ニ女ニ多  
キモノナリ。女ノクセトシテ何方ノ妙見サマカ  
レコノ金毘羅サマ。稻荷サマナド、願ヲカケ物  
タチレアルヒハ百日法華一年精進ナド、テキ  
ヒシキ事ドモナリ。シカレドモ少しモレルニア  
ル事ニアラス。甚レキハ却テ巴々ガ宗旨ノ法謗  
ノ罪ヲウクルモノナリ。ツレムヘレ。イカニトイ

フニ皆願フ所或ハ出来又出世ノスレ。マタハナ  
ヲラ又難病ナドニテ得テ勝手ノ事ノミニテ心  
ニテモフヤウニナラヌ事サヘアレバカナラズ  
神佛ヲセブル事ナリ。サレバ唐土ニモ此事多ク  
アリトテ。ユ、ニテ言フカナワヌ時ノ神々、キト  
イフコトヲ。彼方ニテハ平生香ヲ焼ス。急來レハ  
佛ノ脚ヲイタバクトイフテ。彼國ニテモ笑フ事  
ナリ。此人々ハ多クハ親夫ノ言葉ハ用ヒスト雖  
モ。頼モナキ神佛ノ事トテハ。ブレヤウモノ、ク  
セニ足手ヲハユバセ。肉食ズキノモノカ精進ヲス

ルタグヒヲシナメテ同シ事ナリ。親ヤ夫ノ命ヲ  
外ニナスモノハ佛神トテモ守リタマフヤウテレ  
昔斑婕妤トイヒシ女御帝ノ寵愛淺カラザリレ  
ヲ趙飛燕トイフ女御大ニ子タミテ帝ヘサンゲ  
ンセシハ彼斑氏已ガ寵ヲ專ラニセントテ后宮  
ヲノ口ヒ奉ルト申セシカバヤガテ斑女ヲイマ  
シメ考問アリシニ斑女カ曰。死生命アリ。富貴天  
ニアリ。正シキ事ヲナシテサレ猶シモ幸ヲウク  
ルコト希ナルニ邪ヲナサバ何ヲ以テカヨカラ  
ンヤ。モシ神々ノシロシメス事ナラバ如何程ノ

口フモ甲斐ナクヤ待ラント有シカバ。其言葉ニ  
ウタガヒハレ。金百年ヲタマヒテイヤマレ寵セ  
ラレシトナシ。サレバ管家ノ歌ニ。  
コ、ロダニ誠ノ道ニカサヒナハ祈ラストテモ神ヤ守モシ  
或書ニ曰。人ト鬼ヲ畏ル、ユエニヒト鬼ヲ見ル事  
アリ。犬猫ハ鬼ヲヲル、事ナキユエ犬猫ニ鬼ヲ  
シトイユリ深ク味フヘシ。  
呂氏曰。下氣怡色柔聲。非特事父母當然。凡處已待  
久。皆當體此六字。此節可在補公  
遺言之次誤記  
世俗信浮屠誑誘。凡有喪事無不供佛飯僧云。為死

者滅罪資福使生天堂受諸快樂不爲者必入地獄  
到燒春磨受諸苦楚殊不知死者形既朽滅神亦飄  
散雖有到燒春磨且無所施又况佛法未入中國之  
前人固有死而復生者何故都無一人誤入地獄見  
所謂十王者耶此其無有而不足信也明矣小學  
或曰釋氏地獄之類皆是爲下根之人設此怖令爲  
善明道先生曰至誠貫天地人尚有不能化豈有立偽教而  
人可化乎。述思錄  
世ニ不思議トイフ事ハ有ト定ムルモ無ト定ム  
ルモ皆非雅コトナリ。昔ヨリ聖人此ヲ決定セ又

コトハ深ク意味ノ有コトナリ。サレドモ大概ニ  
是ヲイハバ見ナレ聞ナレ事ハ人モ不思議ト  
セス聞又コトハ人皆フレギトイフナリ。魚ノ耳  
ナフレテ聞蛇ノ足ナフレテ歩キ蚯蚓之目ナフ  
レテミミ蝸ノ口ナフレテナクタグヒハ皆聞ナレ  
見ナレテフレギトセ又モノナリ此故ニ有トセ  
バフレギヲ言立テ人ヲ誑カスノ曲者有之又無  
トセバ我先祖ノ神ヲモマツラ又ヤウニナリ行  
ニ事ヲ恐レテ聖人ハ決定シタマハヌナリ或僧  
夜ル庭ニ出テ何ヤランクヲコギレニ踏レガギ



ウト音レテゲリ。其マ、フレトエ立カヘリ能ク  
業ズルニ極メテ先ニ踏レハ蝦蟇カサカサナラント思ヒ  
サテサテ思ハ不ル殺生ヲナセシ事ノハカナサ  
ヨト目モアハテ居タリシカ。現トモナク夢トモ  
ワカ又ニ青赤ノ兩ツノ鬼火ノ車ヲ引來リテコ  
ノ僧ヲ引立テ行ニハタシテ閻羅主ノ廳下エ引  
スエタリ。彼蝦蟇ハ先達テ閻主ノ前ニ有リテ寛  
死ノアリサマヲ告訴フサマナリケレバ僧ハ黙  
シテ兔角ノユトモ得イワテ罪ニフクシテ種々  
ノ責苦ヲウケツ。クルレミノアマリシアツト

一ト聲エ叫コエレガアリシユカノウエニ冷汗ヲナ  
ガシテゾ居タリケルカリテ夜ノアクルマ、昨  
日踏レ所ニ到リテ見ルニ昔カサカサ氏ヲシタ、カニ踏  
ニレリテアリケルトナシカ、ルコト皆ナ世ノ  
フレギトイフ要カサカサ證ニシテ尤此類多京都言  
永久乃ころゐる女此とてさいひんお  
ゆいすし現件此女をうけ、まよめおふ、東山此お  
ゆいすさんのおとりまをまよめおふ、白河此院つ  
まはか、こつ、あうりあむ、互時、友上人一人、あ  
めんが、めし、う、ま、おのひ乃、あうり、う、ま、あ

ハ五月廿日あるまゝふひ此の事あり五月廿  
三日ハ五つ物にせうりなるおあ  
し併此女を此の申くふよちうり物ごう五つ  
たう此うのふくふよびうり物しを出来此  
かしらふあちうり此をりせうり立うるやう  
まきうめ此かとう子つち此をうある物を  
ちかとうまふひりの物をそのりなるを  
まし此鬼とおふゆるまきうりなる物にまきこ  
るがて此こつちあるへしべうりせんとて君を  
大きにさわりせたりしまはるるに怒ふめん

此下うりまてらふせうりなるを  
めしては申まふあんなるをうりお此とのい  
ころしきりもつてめなるやと作られかくこ  
まうりけあつてあやこむらうり燈因と  
りらばはかのましてまけさおとハ  
まうりたぬき此を己まきをうり  
りらしきりもつてめなるやと作られかくこ  
らまし同くハのいけとらませんと  
まきうりもつてめなるやと作られかくこ  
うりまきうりもつてめなるやと作られかくこ

た盤をしまよつとひきとらむまきてこい  
う子しこりく。ちんをれもの子てハあうりりる  
人あてをひひきんをれ附ら下てんてま火とと  
わひて是を焼うんしんあふ子六十そうり此法  
師也たへハ出たう乃せうし法師まてま  
ふ初とけ子足ありしと糸うせんとうとうと子  
ハ毎うめといふ物まあがうせ入てあうりる  
まハうりりけ子火を入てを抄うりるを  
まぬてふ。ぬてしとてこひま此うりひひ  
んてうりひさうりるるかうりり此火子めや

ひてひとく子あろくちれそうのとくまハ足し  
多々也。あこれい。て。み才子あうりるぬ是とい  
えうろし。まうん。めあうんハいり不祢んふ  
りうあし。ぎ。盤カあうりるをひしを初まてまよふ  
うをれ。弓矢れハをさしうりる物カれとてさ  
し毛所さいあいと。ま。ん。女内也。な。盤  
うをさすれ。ん。れ。平家物語  
巻第六

纂説自警録終

宏齋山内親俊著

蘇州府志卷之四

一、蘇州府志卷之四  
二、蘇州府志卷之四  
三、蘇州府志卷之四  
四、蘇州府志卷之四  
五、蘇州府志卷之四  
六、蘇州府志卷之四  
七、蘇州府志卷之四  
八、蘇州府志卷之四  
九、蘇州府志卷之四  
十、蘇州府志卷之四

